

川内川の土木遺産ツーリズムに関する一考察

Study on tourism of civil engineering heritage in Sendai River

熊本大学工学部社会環境工学科 藤田 将史

1. はじめに

本研究は、川内川流域における地域づくり方策として、土木遺産ツーリズムの有効性を示すことを目的とする。そのためにまず、川内川流域の現況を調査し、課題の抽出を行い、川内川流域の特徴を把握する。次に、土木遺産やツーリズムの整理を行い、土木遺産ツーリズムを定義する。そのうえで、伊佐市を題材にとり、川内川の土木遺産ツーリズムを検証する。

2. 川内川流域の現況調査及び課題の抽出

川内川流域の現況を調査するため、まず、川内川の概要を地形、歴史、生活文化から把握した。次に、土木事業を治水・利水に分けて整理した(図1)。そのうえで、現在の川内川流域の課題の抽出を行った。課題として以下の3つが挙げられた。

①これから先も洪水は起こり得るので、持続的な土木事業が必要であること。

②流域に暮らす人々が、治水・利水の歴史や生業を、資源となる特徴と捉えていないこと。

③最後に、地域資源が点在しているのは、本質は見えてこないということ。

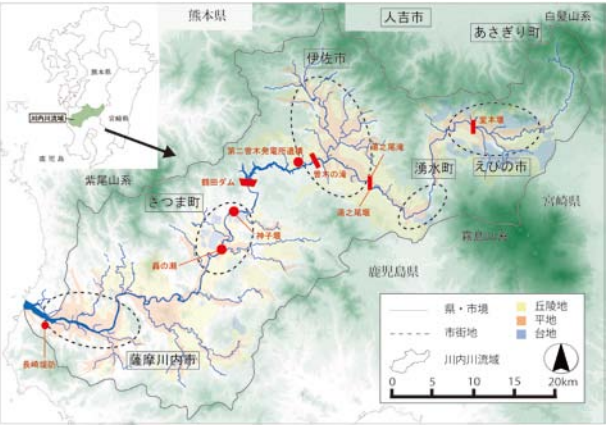


図1 川内川流域図

3. 土木遺産ツーリズムの概要

本章では、土木遺産ツーリズムを定義する。そのためにまず、広義の土木遺産を新たに定義した。次に、ツーリズムと着地型観光の関係を考察し、ツーリズムを定義した。

3.1 土木遺産の定義

本研究では、文化庁や土木学会により価値づけられている土木遺産を狭義の土木遺産とする。加えて、系譜的価値に着目して評価した土木施設を川内川の土木遺産とし、狭義の土木遺産と併せて、広義の土木遺産と定義する。

3.2 ツーリズムの定義

現在実践されているツーリズムと着地型観光との関係

を考察し、ツーリズムを定義する。

ツーリズムとは地域が主体となり、その土地の人や自然、歴史や生活文化を体験・学習することを目的とするものである。またそれは、地域の人と会話をするなどして、直接学ぶ事が重要である。

3.3 土木遺産ツーリズムの定義

本研究では土木遺産ツーリズムを、土木遺産を題材に地域の歴史や人々の生活・生業(治水や利水)技術を学び、土木施設の支えてきた地域の暮らしや生活文化を体験する、グリーン(ルーラル)+ヘリテージツーリズムと定義する。

4. 土木遺産ツーリズムの考察

本章ではまず、川内川との関わりから見る伊佐市の特徴を把握する。次に伊佐市での出来事と、それを現す施設などとのつながりを明らかにする。そのうえで、川内川の土木遺産ツーリズムの有効性を考察した。

4.1 土木遺産ツーリズムの素材

地域の歴史と存在する資源(モノ)及びものがたり(コト)を整理した。点在していたモノはコトによってつながり、川内川の歴史や地域の生業・産業が見えてくる。つまり、土木遺産ツーリズムの素材となる。

4.2 土木遺産ツーリズムの有効性の考察

土木という視点に着目したことにより、コトとモノが繋がり、素材の本質的な内容を理解することができるという点において、土木遺産ツーリズムは有効であると言える(表1)。

表1 ツーリズムの体験・学習的要素の比較

テーマ	素材	モノ	体験・学習的要素				
			産業	歴史	自然	文化	生活
土木遺産ツーリズム	3章で定義した土木遺産ツーリズム	○	○	○	○	○	○
土木遺産ツーリズム	菱刈平野の灌漑と洪水	○	○	○	○	○	○
	天保の川ざらえ	○	○	○	○	○	○
	曾木発電所遺構	○	○	○	○	○	○
	鶴田ダム建設と曾木の滝分水路	○	○	○	○	○	○
エコツーリズム	4章で考察した土木遺産ツーリズム	○	○	○	○	○	○
グリーンツーリズム		○	○	○	○	○	○
ヘルスツーリズム		○	○	○	○	○	○
ヘリテージツーリズム		○	○	○	○	○	○

5. おわりに

本研究では川内川の課題抽出及び土木遺産を定義したうえで、伊佐市を題材に土木遺産ツーリズムの有効性について考察した。資源が点在し、歴史や地域との関わりは表面しか見えていない状態と比べると、資源とものあたりの繋がりから、本質を見ることができる。